

		ふ る	ゆ す る
物体を動かす場合	対象物	手で持ちあげられるもの	手で持ちあげられないような大きいものでもよい
	動かし方	<ul style="list-style-type: none"> •手に持って全体を動かす •腕の付根・肘・手首などを支点とする 	水平方向への反復運動
身体を動かす場合	対象となる 身体部位	独立した動きのできる部分	独立した動きのできない部分
	動かし方	動かす部分と胴体との接合点や関節などを支点としてその部分全体を動かす	小刻みな反復運動

言語経歴：1960年2月墨田区に生まれ、現在に至る。

なでる・さする・こする

石井 龍 治

1. はじめに

この三語の表わす動作自体は、どれも同じようなものである。違いは、力の入れぐあい、動作の回数、動作の目的、動作の手段等であることが、徳川・宮島1972で指摘されている。本稿では、このうち「動作の目的」に着目し、主にこれによってこの三語が使い分けられているということを論じたい。

2. 意味の共通性

三語が表わす動作に共通した部分を記述すると、次のようになる。

〈動作主〉が〈手段〉を〈対象〉に接触させたまま、〈手段〉を移動させる。

まず、次の例を見てみよう。

- (1) 太郎が 掌で 猫の背中を なでる。
- (2) 花子が 掌で 太郎の背中を さする。
- (3) 太郎が 布で 柱を こする。

上の動作の記述の所で〈動作主〉〈手段〉〈対象〉という用語を用いたが、(1)~(3)の例文では、「ガ格名詞句」が〈動作主〉で、「デ格名詞句」が〈手段〉、「ヲ格名詞句」が〈対象〉である。

また、「なでる」には、次のような用法もある。

(4) そよ風が 頬を なでる。

(5) 後毛が 頬を なでる。

(6) 風でふくらんだカーテンが 花子の首筋を なでる。

(4)~(6)の「ガ格名詞句」は、(1)~(3)の「ガ格名詞句」よりも、むしろ「デ格名詞句」に近い。というのは、動作が生起するとき〈対象〉に接触するのは、(4)~(6)では「ガ格にたつもの」であるが、(1)~(3)では「ガ格にたつもの」ではなく、「デ格にたつもの」だからである。そこで、(4)~(6)のような用法の文の場合は、「ガ格名詞句」が〈手段〉を表わしていると考えたい。

ところで、(4)~(6)の例文の「ガ格名詞句」と(1)~(3)の「ガ格名詞句」とを比べてみると、(4)~(6)の「ガ格名詞句」には〔-有生〕のものがきており、(1)~(3)の「ガ格名詞句」には〔+有生〕のものがきていることが分かる。また、(4)~(6)の例文においては、〈手段〉を表わす「デ格名詞句」をたてることができないという違いもあるので、(4)~(6)のような用法を派生的な用法として棚上げし、本稿の分析の対象を(1)~(3)のような用法に限ることとする。

さて、「意味の共通性」についてであるが、たとえば、次の(7)~(9)のような例文は、全く同じような動作について発話されるのではないか。

- (7) 花子が 掌で 次郎の背中を なでる。
- (8) 花子が 掌で 次郎の背中を さする。
- (9) 花子が 掌で 次郎の背中を こする。

(7)(8)の動作に比べて、(9)の動作の方が多少力を入れて行なわれるような印象も受けるが、だからと言って、「力の入れぐあい」だけによって三語の使い分けを説明するのは不可能であろう。この点については、4. 使い分けの周辺のところでも詳述する。

(7)~(9)が全く同じような動作について発話されるとすれば、この三語は、それが表わす動作の様態によってというよりも、むしろそれ以外の何かによって使い分けられていると考えた方がよいのではないか。

3. 使い分けの中心

徳川・宮島1972には、動作の様態以外の要素、すなわち「目的」について次のように記されている。

目的は、「なでる」は愛撫のためが多く、「さする」は、つかれたからだや痛みのある場所をいたわることが多い。……(中略)……「こする」は、つやをだしたり、あたためたりなど、もっと物理的な効果をねらっている。(P. 300)

この点に留意して、以下の例文を見てみよう。まず、「愛撫」の例である。

- (10) 太郎が かわいがっている猫の背中を なでる。
- (11) ? 太郎が かわいがっている猫の背中を さする。
- (12) ?? 太郎が かわいがっている猫の背中を こする。

「太郎」が「かわいがっている猫」を愛撫するために動作を行なうのであれば、(11)(12)は不自然である。

次は、「つかれたからだや痛みのある場所をいたわるような」例である。

- (13) ? 花子が 嘔吐する太郎の背中を なでる。
- (14) 花子が 嘔吐する太郎の背中を さする。
- (15) *花子が 嘔吐する太郎の背中を こする。
- (16) ? 太郎のおじいさんが リウマチで痛む自分の脚を なでる。
- (17) 太郎のおじいさんが リウマチで痛む自分の脚を さする。
- (18) *太郎のおじいさんが リウマチで痛む自分の脚を こする。
- (19) *三郎が ドアにはさまれて激しく痛む左手を なでる。
- (20) 三郎が ドアにはさまれて激しく痛む左手を

さする。

- (21) *三郎が ドアにはさまれて激しく痛む左手を こする。

痛みなどの不快な感覚をやわらげるために動作を行なうのであれば、(13)(15)(16)(18)(19)(21)は不自然である。

次は、つやをだしたり、あたためたりなど「物理的な効果をねらっている」例である。

- (22) *つやを出すために 太郎が 柱を なでる。
- (23) *つやを出すために 太郎が 柱を さする。
- (24) つやを出すために 太郎が 柱を こする。
- (25) *寒さで指がかじかんで字が書けないので 血行をよくするために 花子が 両手を なでる。
- (26) ? 寒さで指がかじかんで字が書けないので 血行をよくするために 花子が 両手を さする。
- (27) 寒さで指がかじかんで字が書けないので 血行をよくするために 花子が 両手を こする。

「物理的な効果」が目的である場合には、「こする」が使われる。ただし、(26)のような場合は、あまり不自然ではない。これは、「寒さ」というのがとりもなおさず「不快な感覚」であり、この「不快な感覚」をやわらげるという目的と、「血行をよくする」という「物理的な目的」とが実質的に完全に一致しているためである。

「こする」は、〈動作主〉が意識的に「物理的な効果」をねらわなくても、結果として「物理的な効果」が生じさえすれば、用いることができる。

- (28) 次郎は 運転が下手なので しょっちゅう パンパーを こする。
- (29) まだインクが乾いていないのに 紙の表面を こすってしまったので 字がきたなくなった。

4. 使い分けの周辺

徳川・宮島1972では、「力の入れぐあい」について次のように記述している。

……「なでる」「さする」「こする」の順に力がはいる。(P. 300)

次の例文を見てみよう。

- (30) 太郎が 猫の背中を なでる。
- (31) 太郎のおじいさんが リウマチで痛む自分の脚を 力をこめて さする。
- (32) 次郎は その紙の表面を 軽く こすっただけだと思ったのに やはりまだインクが乾いていなかったため 字がきたなくなってしまった。

(30)~(32)を客観的に、つまり、物理学的に観察したとすれば、必ずしも「なでる」「さする」「こする」の順に力がはいつているとは言えないであろう。むしろ、

「こする」「なでる」「さする」の順に力がはいっている
と言えそうだ。とすれば、「力の入れぐあい」によって
三語の使い分けを説明するのは不可能ということになる。

とはいうものの、やはり次の例文は不自然である。

(33) *太郎が 猫の背中を 力いっぱい なでる。

(34) *太郎が 花子の頭を 強く なでる。

「なでる」の意味記述には、「軽く」という説明を加
えた方がよさそうである。というのは、次のような例
があるからである。

(35) 太郎が 机の表面を なでる。

(35)の場合、「愛撫」するために動作を行なうと解釈
するよりも、ただ単に「机の表面」に掌などを「軽く」
接触させたまま、掌などを移動させると解釈する方が
自然である。したがって、「なでる」の意味記述には
「目的」を記述せず、「力の入れぐあい」に関する記述
を加えた方が、より一般的な記述になるのではないか。
一方、「さする」「こする」の意味記述には、「力の入
れぐあい」に関する記述は必要無いであろう。

5. まとめ

●なでる / [NP₁が NP₂デ NP₃ヲ ____]

「NP₁がNP₂をNP₃に軽く接触させ
たまま、NP₂を移動させる」

●さする / [NP₁ガ NP₂デ NP₃ヲ ____]
「NP₁がNP₃の痛みなどの不快な感覚
をやわらげるために、NP₂をNP₃に接
触させたまま、NP₂を移動させる」

●こする / [NP₁ガ NP₂デ NP₃ヲ ____]
「NP₁が物理的效果を引き起こすため
に、NP₂をNP₃に接触させたまま、
NP₂を移動させる、あるいは、移動さ
せた結果、つやがでたり、あたたまった
りなど物理的效果が生じる」

(NPは名詞句を示す。また、表層格と意味的な
格との関係は、NP₁が〈動作主〉、NP₂が〈手
段〉、NP₃が〈対象〉である。)

言語経歴：1959年7月愛媛県八幡浜市生 4
歳～18歳松山市 18歳～東京都目
黒区

かえる・もどる

飯 村 学

1. はじめに

「かえる」と「もどる」は、「ある場所(状態)から
ある場所(状態)へ、移動(変化)していたことを前
提とし、もとの場所(状態)に移動(変化)する」と
いう共通の意味をもっている。

ここでは、「かえる」「もどる」について、意味の共
通する部分を中心に分析していくことによって、それ
ぞれの語の特徴を明らかにしていきたい。

(「孵化する」という意味の「かえる」は、ここでは
一応、別語とし、取り上げない。)

2. 分析

まず、意味・用法を分類してみる。

- (1) 子どもが 家に かえる。
- (2) 子どもが 家に もどる。
- (3) バスが 車庫に かえる。
- (4) バスが 車庫に もどる。
- (5) 貸していた鍵が 自分のところに かえる。
- (6) 貸していた鍵が 自分のところに もどる。

(7) めんこが 表に かえる。

(8) ?めんこが 表に もどる。

(9) 問題が 白紙に かえる。

(10) 問題が 白紙に もどる。

ここで、(1)～(6)は移動、(7)(8)は反転、(9)(10)は状態の
変化である。以下、それぞれについて分析していく。

2.1. 移動

始めに「移動」の場合で、「かえる」と「もどる」
の一方が使えない、あるいは用にくい用例をみてみ
たい。

- (11) 遅くまで学校に残っている生徒を かえらせる。
- (12) ?遅くまで学校に残っている生徒を もどらせる。
- (13) *家から 大学に かえる。
- (14) 家から 大学に もどる。
- (15) *二三歩 かえる。
- (16) 二三歩 もどる。
- (17) 貸した金が かえる。
- (18) ?貸した金が もどる。